

2024. 10. 13 (日) 使徒19:21~22

19:21 これらのことがあった後、パウロは御霊に示され、マケドニアとアカイアを通過してエルサレムに行くことにした。そして、「私はそこに行ってから、ローマも見なければならぬ」と言った。

19:22 そこで、自分に仕えている者たちのうちの二人、テモテとエラストをマケドニアに遣わし、自分自身はなおしばらくアジアにとどまっていた。

<説教>

使徒パウロの第3回伝道旅行中のエペソでの出来事、すなわちエペソで神がパウロを用い、パウロを通してなされたみわざから、またはパウロが神のみこころに従って語り行ったことから学んでいます。

ルカが記したことは、まず、ヨハネのバプテスマしか知らず聖霊を受けていなかった十二人ほどの弟子たちが主イエスの名によるバプテスマを受けて、パウロの按手を通して聖霊を受けたこと(19:1-7)。パウロがユダヤ人の会堂に行き三ヶ月間大胆に神の国、主イエスの福音を語り、人々を説得しようと努めましたが、心頑なな者たちが聞き入れず、公然とののしったのでパウロは弟子たちと共に会堂を出てティラノの講堂で福音を宣べ伝えることにしました(8-9)。そして〈これが二年続いたので、アジアに住む人々はみな、ユダヤ人もギリシア人も主のことばを聞〉(10)くことになりました。

更に〈神はパウロの手によって、驚くべき力あるわざを行われた〉(11)ということで、パウロの猿真似をしてみたユダヤ人巡回祈禱師たちの事の顛末(てんまつ)がエペソに住むユダヤ人とギリシア人のすべてに知れ渡り、その結果〈みな恐れを抱き、主イエスの名をあがめるように〉(17)になりました。

そのようにして〈信仰に入った人たちが大勢やって来て、自分たちのしていた行為を告白し、明らかにし〉(18)ました。また〈魔術を行っていた者たちが多数、その書物を持って来て、皆の前で焼き捨て〉(19)ました。〈こうして、主のことばは力強く広まり、勢いを得ていった〉(20)のです。

〈これらのことがあった後〉(21)とは、今振り返ったようなエペソでの出来事のことです。「あった」は直訳的には「成就した、実現した、満ちた、成し終えた」となります。初めに見たように、エペソでの福音宣教の結果、アジアに住む人々がみなユダヤ人もギリシア人も主のことばを聞くことになり(10)、エペソに住むユダヤ人とギリシア人のみなも恐れを抱いて主イエスの名をあがめるようになり(17)、主のことばが力強く広まって勢いを得ていきました(20)。〈これらのこと〉を見たパウロは、自分がエペソで成すように神から与えられた任務は充分果たした、とまさに〈御霊に示され〉(21)て確信したのです。

後にこのエペソの教会の長老たちにパウロは言います。「私は、ユダヤ人の陰謀によってこの身に降りかかる数々の試練の中で、謙遜の限りを尽くし、涙とともに主に仕えてきました。益になることは、公衆の前でも家々でも、余すところなくあなたがたに伝え、また教えてきました。ユダヤ人にもギリシア人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰を証ししてきたのです」(20:19-21)と。また「私は神のご計画のすべてを、余すところなくあなたがたに知らせた」(20:27)と。パウロがたった(とここでは言

うべきでしょう) 2年3ヶ月ほどの間でそれだけの働きをしたとは驚きと言うほかありません。それはパウロが全面的に、100%神のみこころに従い、主イエスのみことばに従い、聖霊の示し導きに従ったことだったにほかなりません。

先に振り返ったようにエペソでも福音を心頑なに聞き入れず、公然とののしり、拒む人々がいました。(まさにこのエペソ滞在中に書かれたとされている)「コリント人への手紙第一」の中でもパウロ自身が次のように言っています。〈エペソで獣と戦った〉(Iコリント 15:22)、(エペソには)〈反対者も大勢いる〉(同 16:9)と。また(この後すぐにマケドニアのピリピで書かれたとされている)「コリント人への手紙第二」の中でも〈アジアで起こった私たちの苦難…非常に激しい、耐えられないほどの圧迫…生きる望みさえ失うほど…大きな死の危険…〉(IIコリント 1:8-10)と。そんな中でもパウロの心、霊は神のみこころを、聖霊の導きを聞き取り、パウロは〈御霊に示され〉て語り行動しました。

さてそのようなパウロが〈御霊に示され〉、「心に決めた」(欄外注参照)ことは、〈マケドニアとアカイアを通過してエルサレムに行くこと〉、そして更には〈そこに行ってから、ローマも見なければならぬ〉ということでした(21)。そして〈自分に仕えている者たちのうちの二人、テモテとエラストをマケドニアに遣わし、自分自身はなおしばらくアジアにとどまっていた〉(22)こと、これも〈御霊に示され〉てのことと見てもいいでしょう。

〈マケドニアとアカイア〉には第2回伝道旅行のとき、やはり聖霊に示されて既に行っていました。マケドニアにはピリピ、テサロニケ、ベレアといった町々があり(16-17章)、アカイアにはアテネ、コリントがありました(17-18章)。今回〈マケドニアとアカイアを通過してエルサレムに行く〉事情についてパウロは、(まさにこの後コリントで書いたと考えられている)「ローマ人への手紙」の中で次のように言っています。「しかし今は、聖徒たちに奉仕するために、私はエルサレムに行きます。それは、マケドニアとアカイアの人々が、エルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために、喜んで援助をすることにしたからです」(ローマ 15:25-26)と。そしてコリントの教会には、「私がそちらに行ってから献金を集めることがないように、あなたがたはそれぞれ、いつも週の初めの日に、収入に応じて、いくらかでも手もとに蓄えておきなさい」(Iコリント 16:2)と言っています。〈テモテとエラストをマケドニアに遣わし〉(21)たのはマケドニアの諸教会でも同じようにするようあらかじめ伝えておくためだったかもしれません。

またパウロにはエルサレムの教会への献金を集めるほかにも、コリントの教会に行く必要もあったようです。コリントの教会には何度も手紙を書いて伝え教えなければならない様々な問題があったからです。「主のみこころであれば、すぐにでもあなたがたのところに行きます」(Iコリント 4:19)とパウロは言いました。

そして〈ローマも見なければならぬ〉こと。これもパウロの単なる思いつきでもなく、スタンドプレーでもありませんでした。「ローマ人への手紙」でパウロは言います。「祈るときにはいつも、神のみこころによって、今度こそついに道が開かれ、何とかしてあなたがたのところに行けるようにと願っています」(ローマ 1:10)。「私はほかの異邦人たちの間で得たように、あなたがたの間でもいくらかの実を得ようと、何度もあなたがたのところに行く計画を立てましたが、今に至るまで妨げられてきました」(同 1:13)と。パウロが「ローマを見る」ことが神のみこころであることは〈御霊に示され〉たことでした。後に主はそのことを一層明らかにしてください(使徒 23:11)。パウロは早くローマに

行きたかったことでしょう。しかしその前に神と〈聖徒たち〉の前に果たすべき務め、神のみこころがあるとも考え、「心に決め」ました。それがまず〈マケドニアとアカイア〉の諸教会からの献金をエルサレムの教会に届けることでした。そのような優先順位を「心に決めた」基準は「御霊の示し」、聖霊の導きでした。

私たちも御霊の示しに敏感であり、従順でなければなりません。そのために、一層熱心に聖書を読み、みことばを学び、祈りらなければなりません。そして日々の生活のすべての領域で神のみこころを求め、神に従う訓練を受けるほかありません。